

エルトゥールル号遭難事件



エルトゥールル号殉難将士慰霊碑
(和歌山県串本町)



アブデュルハミト2世



写真はオスマン帝国海軍「エルトゥールル」。

エルトゥールル号遭難事件（エルトゥールルごうそうなんじけん）とは、1890年（明治23年）9月16日夜半、オスマン帝国（その一部は現在のトルコ）の軍艦エルトゥールル(Ertuğrul Firkateyni)が、現在の和歌山県串本町沖にある、紀伊大島の檜野埼東方海上で遭難し500名以上の犠牲者を出した事件。

現在、和歌山県串本町とトルコのヤカケント町、メルスィン市は姉妹都市である。檜野埼灯台そばには、エルトゥールル号殉難将士慰霊碑およびトルコ記念館が建っており、町と在日本トルコ大使館の共催による慰霊祭が5年ごとに行われている。

1 事件の経過

1.1 訪日

木造フリゲート・エルトゥールル(1864年建造、全長76m)は、1887年に行われた小松宮夫妻のイスタンブル訪問に応えることを目的に、オスマン帝国海軍の航海訓練を兼ねて大日本帝国（日本）へ派遣されることとなった。

1889年7月14日、イスタンブルを出港。数々の困難に遭いながらも航海の途上に立ち寄ったイスラム諸国で歓迎を受けつつ、11か月をかけて翌1890年6月7日に、ようやく日本に到着した。横浜港に入港したエルトゥールルの司令官オスマン・パシャを特使とする一行は6月13日に皇帝親書を明治天皇に奉呈し、オスマン帝国最初の親善訪日使節団として歓迎を受けた。



紀伊大島トルコ記念館の直下の海岸。画面奥中央の岩礁にエルトゥールル号が乗り上げ座礁した。



檜野崎灯台

1.2 帰途に遭難

エルトゥールルは出港以来、蓄積し続けた艦の消耗や乗員の消耗、資金不足に伴う物資不足が限界に達していた。また、多くの乗員がコレラに見舞われたため、9月15日になってようやく横浜出港の目処をつけた。そのような状況から、遠洋航海に耐えないエルトゥールルの消耗ぶりをみた日本側が台風の時期をやり過ごすように勧告するも、オスマン帝国側は、その制止を振り切って帰路についた。このように無理を押しつけてエルトゥールルが派遣された裏には、インド・東南アジアのムスリム（イスラム教徒）にイスラム教の盟主・オスマン帝国の国力を誇示したい皇帝・アブデュルハミト2世の意志が働いており、出港を強行したのも、日本に留まりつづけることでオスマン帝国海軍の弱体化を流布されることを危惧したためと言われている。遭難事件はその帰途に起こった。

9月16日21時ごろに* [1]、折からの台風による強風にあおられ紀伊大島の檜野崎に連なる岩礁に激突、座礁したエルトゥールルは、機関部に浸水して水蒸気爆発を起こし22時半ごろに沈没した* [1]。これにより、司令官オスマン・パシャをはじめとする600名以上が海へ投げ出された。

1.3 救難活動

檜野崎灯台下に流れ着いた生存者の内、約10名が数十メートルの断崖を這い登って灯台にたどりついた。灯台守は応急手当を行なったが、お互いの言葉が通じず、国際信号旗を使用して、遭難したのがオスマン帝国海軍軍艦である事を知った* [1]。通報を受けた大島村（現在の串本町）檜野の住民たちは、総出で救助と生存者の介抱に当たった。この時、台風により出漁できず、食料の蓄えもわずかだったにもかかわらず、住民は浴衣などの衣類、卵やサツマイモ、それに非常用のニワトリすら供出するなど、生存者たちの救護に努めた。この結果、檜野の寺、学校、灯台に収容され

た69名が救出され、生還することが出来た。その一方で残る587名は、死亡または行方不明となり、大惨事となった。遭難の翌朝、事件は檜野の区長から大島村長の沖周（おきしゅう）に伝えられた。付近を航行中だった船に、大島港へ寄港してもらい、生存者2名が連絡のため神戸港に向かった。神戸港に停泊中だったドイツ砲艦「ウォルフ」が大島に急行し、生存者は神戸に搬送、病院に収容された* [1]。沖村長は県を通じて大日本帝国政府に通報した。知らせを聞いた明治天皇は、政府に対し、可能な限りの援助を行うよう指示した。各新聞は衝撃的なニュースとして伝え、義捐金・弔慰金も寄せられた。

1.4 送還

日本海軍のコルベット艦、「比叡」と「金剛」が、遭難事故の20日後の10月5日に、東京の品川湾から出航、神戸で生存乗員を分乗させ、翌年の1891年1月2日にオスマン帝国の首都・イスタンブルに送り届けた* [1]。なお2隻には、秋山真之ら海兵17期生が少尉候補生として乗り組んだ。

- 比叡
- 金剛

トルコでは知名度が高い事件ではなく、2012年2月から3月にかけて外務省がトルコの民間会社に委託して行った調査によると、エルトゥールルの遭難事件を「知っている」と回答したのは29.9%程度で、日本の経済協力案件である第2ボスボラス大橋（44.9%）や、マルマライ計画（52.5%）より、認知度は低い* [2]。

1.5 追悼と検証

串本町で5年に一度、追悼式典が行われており* [3]、2008年（平成20年）6月7日、訪日していたアブドゥラー・ギョル大統領は、同国の大統領

として初めてこの地を訪れ、遭難慰霊碑前で行われた追悼式典に出席し献花を行った*[4]*[5]*[6]。

エルトゥールルの残骸は、2007年（平成19年）から、トルコを中心とする数カ国からなる水中考古学の調査団が調査を進めている*[7]。2008年（平成20年）1月-2月、米国・海洋考古学研究所のトルコ人スタッフらが発掘調査を行い、遺骨や弾丸など1000点以上の遺品を引き揚げた。錨は未だに見つかっておらず、2010年（平成22年）1月8日に沈没地点近くの海底にて探索作業が行われている*[8]。

2 遭難事件後の日土関係

エルトゥールルの遭難はオスマン帝国内に大きな衝撃を呼んだが、アブデュルハミト2世のもとでは人災としての側面は覆い隠され、天災による殉難と位置付けられ、新聞で大きく報道されるとともに、遺族への弔慰金が集められた。またこのとき新聞を通じて大島村民による救助活動や、日本政府の尽力が伝えられ、当時オスマン帝国の人々は、遠い異国である日本と日本人に対して、好印象を抱いたといわれている。

2.1 山田寅次郎

茶道宗徧流の跡取り、山田寅次郎もこの事件に衝撃を受けた日本人のひとりであった。彼は日本国内で民間から『エルトゥールル号事件の犠牲者の遺族に対する義捐金』を集めるキャンペーンを行い、事件の翌々年に、集まった義捐金を携えて自らオスマン帝国の首都・イスタンブルに渡った。

山田が民間人ながら義捐金を持ってやってきたことが知られるや、彼は熱烈な歓迎を受け、皇帝アブデュルハミト2世に拝謁する機会にすら恵まれた。このとき、皇帝の要請でトルコに留まることを決意した山田は、イスタンブルに貿易商店を開き、士官学校で少壮の士官に日本語や日本のことを教え、政府の高官のイスタンブル訪問を手引きするなど、日土国交が樹立されない中で官民の交流に尽力した。彼が士官学校で教鞭をとった際、その教えを受けた生徒の中には、後にトルコ共和国の初代大統領となったムスタファ・ケマルもいたとされる。

山田がイスタンブル滞在中に起こった日露戦争が日本の勝利に帰すと、長らくロシアから圧力を受け続け、同様にロシアの南下圧力にさらされる日本に対して、親近感を高めていたオスマン帝国の人々は、東の小国日本の快挙としてこれに熱狂した。日本海海戦時の連合艦隊司令長官であった東郷平八郎提督にちなんで、トゴウという名を子供につけることが流行したという。

2.2 日土国交

大日本帝国とオスマン帝国の外交当局による国交交渉は何度も行われたが、大日本帝国側が欧米列強と同等の待遇の条約を望み、治外法権を認めるよう要求したのに対し、オスマン帝国は不平等条約の拡大を嫌い、両者の交渉が暗礁に乗り上げたため、オスマン帝国の滅亡まで正式な国交が結ばれることはなかった。

1914年（大正3年）、第一次世界大戦が勃発すると、ドイツら同盟国側に引き入れられつつあったオスマン帝国の対外情勢は緊迫し、山田はイスタンブルの店を閉鎖して日本へと帰国した。この戦争でイギリスら連合国の側について大日本帝国は、オスマン帝国とは敵同士となり、戦後のオスマン帝国の解体とトルコ共和国の成立という目まぐるしい情勢の変化を経て、1924年（大正13年）発効のローザンヌ条約締結・1925年（大正14年）の大使館開設により、大日本帝国政府とトルコ共和国政府は正式に国交を結んだ。

2.3 公的記憶

エルトゥールル号遭難事件はオスマン帝国末期の外交政策と海軍の弱体化がもたらした悲劇であったが、この事件で被害者に対して示された日本人の友誼は、その後も長く日土友好関係の起点として両国の関係者に記憶されることになった。トルコ人が公的な場で日本人に対して日土友好の歴史について語るとき、必ずといっていいほど第一に持ち出されるのがエルトゥールル号遭難事件の顛末である。一方、こうしたトルコ人の言説に対して、エルトゥールル号遭難事件の顛末は、日本において事件の近くの串本町以外では、あまり記憶されておらず、長らく公的な場で語られることすらもまれであった。

しかし、近年では、小学4年生の道徳の教科書*[9]に記載されて一部の小学校では教えられている*[10]。また、中学生のある歴史の教科書*[11]にも掲載されている。

2.4 イラン・イラク戦争

21世紀に入ってからエルトゥールル号事件の顛末が、1985年（昭和60年）のイラン・イラク戦争における逸話と絡めて、インターネット上の電子掲示板やメールマガジンで紹介される機会が増えた。

当時、イラクのサダム・フセインは、イラン上空の航空機に対する期限を定めた無差別攻撃宣言を行った。各国は期限までにイラン在住の国民をメヘラーバード国際空港から軍用機や旅客機で救出したものの、日本は自衛隊の海外派遣不可の原則のために、航空自衛隊機による救援が出来なかった。さらに、日本航空は「イランとイラク

による航行安全の保証がされない限り、テヘランのメヘラーバード国際空港行きへの臨時便は出さない」とし*[12]、在イラン邦人はメヘラーバード国際空港の出発ロビーで、誰にも助けて貰えない危機的状況に陥った。野村豊 イラン駐在大使が、トルコのビルレル駐在大使に窮状を訴えたところ、ビルレル大使は「わかりました。ただちに本国に求め、救援機を派遣させましょう。トルコ人なら誰もが、エルトゥールルの遭難の際に受けた恩義を知っています。ご恩返しをさせていただきますとも。」と答えた*[13]。大使の要請を受けたトルコ航空は自国民救援のための最終便を2機に増やし、機長オルハン・スヨルジュ（2013年2月24日死去）らがフライトを志願。215名の日本人はこれに分乗し、期限ぎりぎりまで危機を脱することができた。全員、トルコ経由で無事に帰国できたのである。ちなみにトルコ機は、トルコがイラン近隣に位置することから、陸路での脱出もできる自国民よりも日本人の救出を優先。この救援機に乗れなかったトルコ人約500名は、陸路自動車でイランを脱出することとなった。

なお、2013年現在では自衛隊法が改正されており、有事により在外邦人を国外に脱出させる必要が生じた時は、外務省が在外公館を通じて、相手国の許可を得た上で、防衛大臣の指揮により、自衛隊の日本国政府専用機や護衛艦によって在外邦人を輸送する。また自衛隊は在外邦人輸送訓練を毎年行っている。

この逸話は、特に2002年（平成14年）のサッカー、2002 FIFA ワールドカップでのサッカートルコ代表チームの活躍を機として、盛んにテレビ番組や雑誌でも取り上げられ、日本の一般の人々の間にも徐々に広められるようになった。2004年（平成16年）には、これらのことを紹介した児童書が小学生高学年向けの読書感想文コンクール課題図書*[14]になり、現在では日本でも、「親日国トルコ」のイメージを語るエピソードとしてなくてはならないものとなった。

2006年（平成18年）、日本政府は、イランで救出に当たったトルコ人の客室乗務員など13人に勲章を授与し、感謝の気持ちを送った*[15]。

2007年（平成19年）10月28日、同時期に開催されたエルトゥールル号回顧展に併せて、東京都三鷹市の中近東文化センターでこの事件に関するシンポジウムが、当該トルコ航空機の元機長、元客室乗務員、野村元駐イラン日本国特命全権大使、森永元伊藤忠商事イスタンブール支店長、毛利悟元東京銀行テヘラン駐在員ら当時の関係者出席の上で開催されている。

3 エルトゥールル号遭難事件を扱った作品

3.1 小説

- 『海の翼』秋月達郎（2010年3月新人物往来社新人物文庫 / 2014年7月PHP文芸文庫）
- 『トルコ軍艦エルトゥールル号の海難』オメル・エルトゥール著、山本雅男・植月恵一郎・久保陽子訳（2015年11月彩流社）

3.2 絵本

- 『エルトゥールル号の遭難トルコと日本を結ぶ心の物語』寮美千子文、磯良一絵（2013年6月小学館発売*[16]。厚生労働省「子どもたちに読んでほしい本」選定図書*[17]）

3.3 漫画

- 『Teşekkür ederim』石川雅之（講談社『モーニング』2014年21・22合併号掲載読切作品）

3.4 映画

- 『海難1890』田中光敏監督、小松江里子脚本（2015年12月公開日本・トルコ合作）*[18]。

4 脚注

- [1] 駐日土耳其國大使館『エルトゥールル号』、1937年。
- [2] “トルコにおける対日世論調査（結果概要）”. 外務省. 2012年5月22日閲覧。
- [3] そうだったのか！池上彰の学べるニュース2月9日放送
- [4] アブドゥッラー・ギュル・トルコ大統領の訪日
- [5] エルトゥールル号事件にはじまるトルコと串本町の友好
- [6] エルトゥールル号120年慰霊式典
- [7] 「船甲羅周辺で遺品多数トルコ軍艦調査団」『紀伊民報』（2007年1月27日）
「来年、遺品引き揚げトルコ軍艦調査団」『紀伊民報』（2007年1月27日）
「串本町沖で沈没したエルトゥールル艦の引き上げプロジェクト、今月実施」*Milliyet*（2007年1月5日）東京外国語大学による日本語訳
- [8] “1890年に沈没トルコ軍艦、錨はどこに?”. *YOMIURI ONLINE* (読売新聞). (2010年1月8日) 2010年1月8日閲覧。
- [9] きみがいちばんひかるとき（光村図書出版）
- [10] そうだったのか！池上彰の学べるニュース2月9日放送
- [11] 新しい歴史教科書（扶桑社）

- [12] エルダグ・ギュベン『テヘラン脱出』（トルコ商工会議所）※非売品
- [13] トルコの時代（2003年日本におけるトルコ年公式サイト）
- [14] 木暮正夫／作、相澤るつ子／絵『救出日本・トルコ友情のドラマ』（アリス館）ISBN 4-7520-0254-X ※第50回青少年読書感想文全国コンクール小学校高学年の部（5・6年生）課題図書
- [15] そうだったのか！池上彰の学べるニュース2月9日放送
- [16] エルトゥールル号の遭難
- [17] 平成25年度社会保障審議会児童福祉文化財推薦作品一覧
- [18] 「海難1890」製作委員会 - オフィシャルサイト

5 参考文献

- 森修『トルコ軍艦エルトゥールル号の遭難：日本・トルコ友好の偉大な礎石』（日本トルコ協会1990年）
- 松谷浩尚『イスタンブールを愛した人々』（中公新書1998年）
- 小松香織『オスマン帝国の近代と海軍』（山川出版社世界史リブレット2004年）
- 高橋忠久、長場紘、大村幸弘、松原茂樹他『エルトゥールル号回顧展：日本とトルコ友好のかけ橋』（中近東文化センター附属博物館2007年）
- 山田邦紀、坂本俊夫『東の太陽、西の新月 - 日本・トルコ友好秘話「エルトゥールル号」事件』（現代書館2007年）ISBN 978-4-7684-6958-3

6 関連項目

- エルトゥールル - オスマン帝国の始祖・オスマン1世の父。同艦の艦名の由来となった人物。
- 桂秀馬 - 明治天皇の命により、遭難者の救助・治療にあたった宮内省侍医。1891年（明治24年）トルコ皇帝より勲章が送られた。
- イルティッシュ号投降事件 - 1905年、日本海海戦で損傷したロシア軍艦が島根県の海岸で投降。地元住民が献身的な救助活動を行った。

7 外部リンク

- 軍艦エルトゥールル号（在日本トルコ大使館ホームページ）（日本語）
- The Ertuğrul frigate disaster（トルコ海軍ホームページ内、キャッシュ）（英語）
- トルコ海軍ホームページ（英語）
- トルコとの交流～エルトゥールル号の遭難～（串本町ホームページ）（日本語）
- 1890 エルトゥールル号事件報告書（中央防災会議・災害教訓の継承に関する専門調査会）（日本語）

8 文章および画像の出典、投稿者、ライセンス

8.1 文章

- エルトゥールル号遭難事件 出典: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A8%E3%83%AB%E3%83%88%E3%82%A5%E3%83%BC%E3%83%AB%E3%83%AB%E5%8F%B7%E9%81%AD%E9%9B%A3%E4%BA%8B%E4%BB%B6?oldid=57796302> 投稿者: Gombe, Carbuncle, Safkan, Usagito, Kawai, 高木あゆみ, K-SYAN, Nike, ぎゅうひ, Jira, Yhr, Opqr, Los688, Maldoror~jawiki, RadioActive, Ajtnk, 663highland, Kouchiumi, Etoa, Kotoito, 釣ちごちゅが, 経済準学士, 松茸, Kogane, Mixtures, Blooms, 代言人, Centaurus, Tamtarm, 梅桃桜, Kanjy, 継之助, Nakaoka7675, 九鬼備助, TT, K o Z, Nsq, Iaraki, 浩, Fromm, Nonomura, Tassi-, 大根, MioUzaki, いろはにほへと, さーとる, VolkovBot, Hukurou, 七篠権兵衛, Tossie, Geogie, しまあじ, JR1NVB, Reedo, K. BigFriend, Brackcandy, 花蝶風月雪月花警部, Takabeg, るなあるてみず, Doppo1127, 樺, Seven twenty-nine, Cpa2007~jawiki, Sweeper tamonten, 曾禰越後守, MDR-SK, Ptbotgourou, Chichiii, 白拍子花子, 豊平大権現, Nkashiwa, Xqbot, Mokuma881962, 男梅, Hashimoto1995, 柴崎力栄, サンシャイン劇場, 西武線が好きな人, Naaa2000, Terumasa, ダックス, Jyjjy12251960, 直蔵, SEITARO OKADA, Sky Wing Sky, Hideax, Suikotei, Kawamura s, Hruygo, Tarot21, 守山太郎, OskNe, Indiana jo, Garakmiu2, Corpsebot, Vaamwater, 福田大佐, Royalticking, 西野真, Ançglis, Old jacket, John Hakater と匿名: 72

8.2 画像

- ファイル:Abdul_Hamid_II_in_Balmoral_Castle_in_1867.jpg 出典: https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/1/17/Abdul_Hamid_II_in_Balmoral_Castle_in_1867.jpg ライセンス: Public domain 投稿者: This image is available from the United States Library of Congress's Prints and Photographs division under the digital ID cph.3b24436.
This tag does not indicate the copyright status of the attached work. A normal copyright tag is still required. See Commons:Licensing for more information. 原著者: 不明
- ファイル:ErtugrulFirkateyn.png 出典: <https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/6/6e/ErtugrulFirkateyn.png> ライセンス: Public domain 投稿者: Turkish Navy 原著者: Ottoman Empire
- ファイル:Kasinosaki-Lighthouse_Feb2010.jpg 出典: https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/0/09/Kasinosaki-Lighthouse_Feb2010.jpg ライセンス: CC BY-SA 3.0 投稿者: 投稿者自身による作品 原著者: 玄史生
- ファイル:Kii_oshima_turkey_ship_crash001.JPG 出典: https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/9/9e/Kii_oshima_turkey_ship_crash001.JPG ライセンス: CC BY-SA 3.0 投稿者: 投稿者自身による作品 原著者: Opqr
- ファイル:Kushimoto-toruko-ireihi1.jpg 出典: <https://upload.wikimedia.org/wikipedia/ja/1/1d/Kushimoto-toruko-ireihi1.jpg> ライセンス: GFDL 投稿者:
Photo by Si-take. 原著者:
Si-take.

8.3 ライセンス

- Creative Commons Attribution-Share Alike 3.0